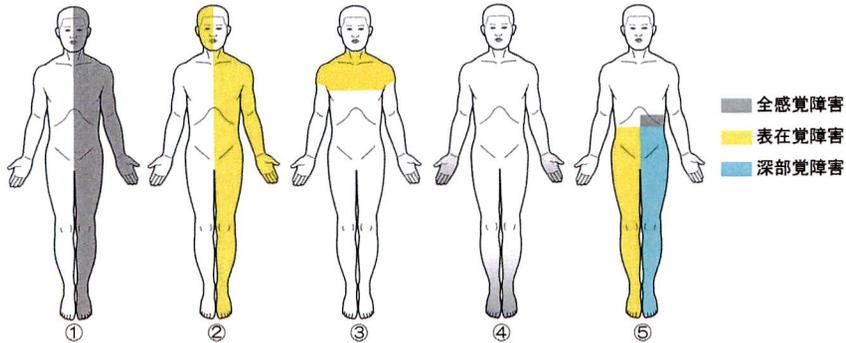


1 図の中で、脊髓空洞症で見られる感覚障害の分布はどれか。

- a ①
- b ②
- c ③
- d ④
- e ⑤



図

2 喀痰検査で Ziehl-Neelsen 染色が陽性、結核菌核酸増幅検査でも陽性の患者で誤っているのはどれか。

- a 薬剤感受性検査を行う。
- b 保健所は接触者検診を行う。
- c 結核病棟に入院のうえ治療を開始する。
- d 結核診断後 48 時間以内に保健所長に届け出る。
- e 医療費公費負担申請書のための診断書を作成する。

3 感染症法で 3 類感染症はどれか。

- a 細菌性赤痢
- b アメーバ赤痢
- c 髄膜炎菌性髄膜炎
- d 劇症型溶血性レンサ球菌感染症
- e バンコマイシン耐性腸球菌感染症

4 疾患と好発部位の組合せで誤っているのはどれか。

- a クロウン病 ————— 回盲部
- b 偽膜性腸炎 ————— 直腸
- c 放射線性腸炎 ————— S状結腸
- d 虚血性大腸炎 ————— 下行結腸
- e 潰瘍性大腸炎 ————— 直腸

5 心弁膜症に関する記述で正しいのはどれか。2つ選べ。

- a 大動脈弁狭窄症ではI音が亢進する。
- b 大動脈弁閉鎖不全症ではII音が減弱する。
- c 僧帽弁狭窄症では拡張中期ランブル音が聴取される。
- d 僧帽弁閉鎖不全症では拡張期逆流性雑音が聴取される。
- e 僧帽弁狭窄症では前収縮期雑音の出現時期が重症度と関連している。

6 高血圧性脳出血と同じ責任血管で生じる虚血性の脳血管障害はどれか。

- a アテローム血栓性脳梗塞
- b 心原性脳塞栓
- c 静脈洞血栓症
- d ラクナ梗塞
- e 動脈解離

7 成人T細胞白血病について、誤っているのはどれか。2つ選べ。

- a 地域によって、発症頻度に偏りがある。
- b HTLV-Iの感染経路として、輸血によるものが多い。
- c 急性型は、抗腫瘍薬に抵抗性のことが多く予後不良である。
- d サイトメガロウイルスなどの日和見感染症を合併しやすい。
- e HTLV-Iウイルス感染者（キャリア）の約半数に発症する。

8 正しいのはどれか。

- a 原発性肺高血圧症は若年男性に多い。
- b 肺動静脈瘻の確定診断法はTBLBである。
- c 肺水腫では肺毛細血管静水圧の低下がみられる。
- d 急性肺血栓塞栓症では肺動脈圧楔入圧の上昇がみられる。
- e 肺葉外肺分画症に合併する奇形は横隔膜ヘルニアが多い。

- 9 Zollinger-Ellison 症候群について正しいものはどれか。2つ選べ。
- a 水様性下痢をきたす。
 - b 化学療法が奏効する。
 - c 壊死性遊走性紅斑を認める。
 - d 血管造影にて腫瘍濃染像を呈す。
 - e 多発性内分泌腺症 (MEN) 2 型を合併する。

- 10 関節リウマチの診断に最も特異性の高い検査はどれか。
- a 赤沈
 - b MMP-3
 - c 血清補体価
 - d 抗CCP抗体
 - e リウマトイド因子

- 11 左室容量負荷疾患はどれか。
- a 大動脈縮窄症
 - b 動脈管開存症
 - c 肺動脈閉鎖症
 - d ファロー四徴症
 - e 総肺静脈還流異常症

- 12 弛緩出血の点滴治療として適切なものはどれか。3つ選べ。
- a オキシトシン
 - b リトドリン塩酸塩
 - c 硫酸マグネシウム点滴
 - d プロスタグランジン F2_α
 - e メチルエルゴマレイン酸塩

- 13 金属中毒と健康障害の組合せで誤っているのはどれか。
- a クロム—————肺がん
 - b カドミウム—————腎障害
 - c ヒ素—————皮膚癌
 - d ベリリウム—————肺の肉芽腫
 - e マンガン—————感作性皮膚炎

- 14 頬骨骨折でみられない症状はどれか。
- a 鼻出血
 - b 知覚障害
 - c 開口障害
 - d 咬合不全
 - e 三叉神経麻痺

- 15 視床下部に好発する腫瘍はどれか。2つ選べ。
- a 髄芽腫
 - b 髄膜腫
 - c 胚細胞腫
 - d 頭蓋咽頭腫
 - e 悪性リンパ腫

- 16 強迫性障害について誤っているのはどれか。
- a 罪業妄想が併発しやすい。
 - b 日常生活機能が障害される。
 - c 強迫観念の内容は了解可能である。
 - d 大うつ病性障害が併存することがある。
 - e 患者は強迫行為を不合理であると自覚している。

- 17 アレルギー性疾患とその診断方法について正しい組合せはどれか。
- a バッチテスト—————蕁麻疹
 - b 内服誘発試験—————Stevens Johnson 症候群
 - c ω5 グリアジン—————小麦運動誘発アナフィラキシー
 - d RAST—————接触皮膚炎
 - e スクラッチテスト—————固定薬疹

- 18 前立腺肥大症について正しいのはどれか。
- a 前立腺癌の前癌病変である。
 - b 腹圧性尿失禁を高率に生じる。
 - c MRI 検査は診断に必須である。
 - d 血清PSA 検査は診断に必須である。
 - e 主に前立腺内腺が肥大することにより症状を呈する。

19 たばこの害について誤っているのはどれか。

- a 喫煙率は高齢者で高い。
- b 喫煙は食道癌の危険因子である。
- c 喫煙は脳卒中の危険因子である。
- d 受動喫煙は低出生体重児出産の危険性を高める。
- e 副流煙は主流煙よりも多くの粒子状物質を含んでいる。

20 3歳の男児。運動障害を主訴に来院した。乳児期からおむつにレンガ色の粉末が付着していることが多かった。1歳頃から、つかまり立ちができなくなり、お坐りもできなくなった。その後、アテトーゼ様の不随意運動が次第に強く出現するようになった。内反尖足傾向となり臥位姿勢となった。知的にも退行がみられるようになった。尿所見：蛋白(-)、潜血2+、沈渣に赤血球20~30/1視野。血清生化学所見：尿酸11.2 mg/dl。

認められる症候はどれか。

- a 難聴
- b 皮膚炎
- c 自傷行為
- d 視力障害
- e てんかん

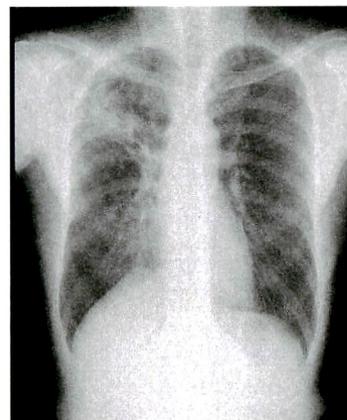
21 68歳の男性。2年前より咳嗽、喀痰が出現。1か月前から咳嗽が強くなり、微熱を認めるようになったため受診した。体温 37.4℃。右肺野でcoarse cracklesを聴取。血液所見：白血球 7,800、Hb 11.8 g/dl、血小板 30.1万。血液生化学所見：異常所見なし。CRP 1.15 mg/dl。

喀痰の抗酸菌塗抹検査で3回陽性であったが、結核菌PCR検査は陰性であった。

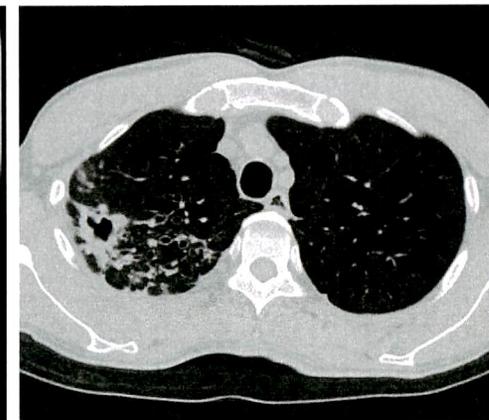
胸部エックス線写真、胸部CTを示す。咳嗽は増強し、1か月後の画像所見も増悪していたため、抗菌薬を3剤用いて治療を開始することとした。

リファンピシン、エタンブトールと併用して選択するものはどれか。

- a アマンタジン
- b ペニシリンG
- c バンコマイシン
- d ピラジナマイド
- e クラリスロマイシン



胸部エックス線写真



胸部CT

22 生後5か月の乳児。嘔吐と不機嫌とを主訴に来院。少し前からぐずぐず不機嫌になったのを母親が気づいていた。様子をみていたが嘔吐したので受診した。右鼠径部に鶏卵大の固い腫瘤を触知し、この部分を押すと大きな声で泣く。この腫瘤の超音波検査では、腸管と思われる構造を認め、その内部に液体を貯留する所見を得た。

まず行うのはどれか。

- a 緊急手術
- b 用手還納
- c 腫瘤の穿刺
- d 抗生剤の投与
- e グリセリン浣腸

23 2歳の男児。発熱と血便とを主訴に入院した。2日前から発熱と1日15回程度と頻回の下痢とがあり、本日より血便がみられた。顔面は蒼白で、皮膚に軽度の黄疸と点状出血とを認める。眼瞼と四肢に浮腫を認める。尿所見：蛋白3+、潜血3+。血液所見：赤血球270万、Hb 6.5 g/dl、白血球12,300、血小板1.2万。血液生化学所見：尿素窒素30 mg/dl、クレアチニン1.8 mg/dl、総ビリルビン3.2 mg/dl、AST 40 IU/l、ALT 32 IU/l、LDH 3,200 IU/l (基準260~530)。末梢血に破碎赤血球を多数認める。

最も考えられる疾患はどれか。

- a 遺伝性出血性末梢血管拡張症
- b 遺伝性球形赤血球症
- c 溶血性尿毒症症候群
- d Henoch - Schönlein紫斑病
- e 特発性血小板減少性紫斑病

24 49歳の女性。動悸、頭痛とのぼせを主訴に受診。ここ半年間に月経は2回しか発来していない。身長155 cm、体重75 kg。子宮は小鶏卵大、両側付属器は触知しない。

まず行うこととして正しいのはどれか。

- a 血圧を測定する。
- b 子宮がん検診を行う。
- c 経膈超音波検査を行う。
- d ゴナドトロピン値を測定する。
- e エストラジオール値を測定する。

25 17歳の女子。10日ぐらい前からの全身倦怠感、咽頭痛、発熱を主訴に受診した。発熱は38℃前後で持続していたがときどき40℃近くまで上昇し、食事や水分が取れなくなった。意識は清明。体温39.2℃。呼吸数12回/分。脈拍80/分、整。両側頸部に径1 cm程度のリンパ節を数個触知する。リンパ節は表面平滑、軟で圧痛なく可動性良好である。心音と呼吸音に異常を認めない。血液所見：赤血球420万、白血球12,800 (好中球30%、好酸球1%、好塩基球1%、リンパ球56%、異型リンパ球12%)、血小板18万。血液生化学所見：総蛋白6.4g/dl、アルブミン3.5g/dl、総ビリルビン0.8mg/dl、AST 320IU/l、ALT 196IU/l、LDH 368IU/l (基準値119~229)。咽頭の写真を示す。

初期療法として適切なのはどれか。

- a 輸液療法
- b アシクロビルの投与
- c 副腎皮質ステロイドの投与
- d ペニシリン系抗菌薬の投与
- e インターフェロン α の投与



咽頭の写真

26 28歳の男性。3日前に焼き鳥屋で飲食をした。昨夜から38℃の発熱が持続し、夜中より腹痛、血液が混入する下痢、嘔気、嘔吐が出現するようになり来院した。

適切な治療薬はどれか。

- a メトロニダゾール
- b 塩酸バンコマイシン
- c 副腎皮質ホルモン薬
- d マクロライド系抗菌薬
- e 5アミノサリチル酸製剤

27 58歳の男性。健康診断で高血圧症を指摘され来院した。血圧172/98 mmHg。腹部に血管雑音を聴取する。血清生化学所見：Na 144 mEq/l、K 2.9 mEq/l、Cl 102 mEq/l。血清レニン活性高値。血清カテコラミン分画正常。選択的右腎動脈造影を以下に示す。

考えられるのはどれか。

- a 褐色細胞腫
- b 本態性高血圧
- c 腎血管性高血圧
- d 腎実質性高血圧
- e 原発性アルドステロン症

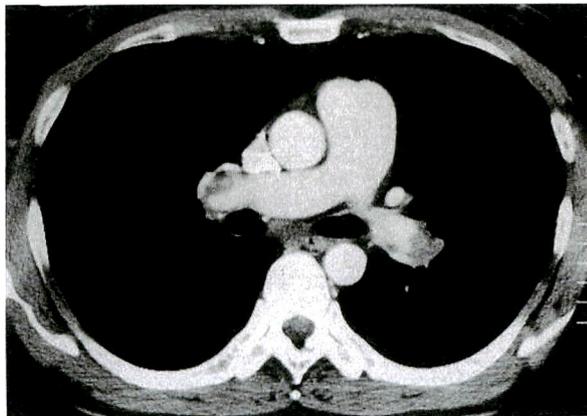


選択的右腎動脈造影

28 43歳の男性。作家業で長時間座っていることが多く、当日も一日中机に向かい原稿を書いていた。突然の胸痛と呼吸困難を自覚したため救急搬送となった。体温36.2℃。呼吸数28/分。脈拍100/分。整。血圧90/72 mmHg。II音の亢進を認める。Dダイマー15.0 μg/ml（基準1.0以下）。CK、CK-Mb値は正常。CRP 3.1 mg/dl。動脈血ガス分析（自発呼吸、room air）：pH 7.468、PaO₂ 51 Torr、PaCO₂ 32 Torr。胸部造影CTを示す。

考えられるのはどれか。

- a 気胸
- b 肺炎
- c 無気肺
- d 肺水腫
- e 肺血栓塞栓症



胸部造影CT

29 46歳の男性。頭蓋咽頭腫術後に、口渇感、夜間多尿を自覚したため、尿崩症と診断され、デスマプレシンの点鼻による治療を開始した。治療開始後に、口渇感は改善したが、めまい、ふらつき等の症状が出現したため来院した。飲水量は、治療開始後も1日4~5 lを摂取し続けている。身長170 cm、体重78 kg。体温36.4℃。血圧122/76 mmHg。空腹時血糖120 mg/dl、尿素窒素12 mg/dl、クレアチニン0.74 mg/dl、尿酸3.8 mg/dl、Na 128 mEq/l、K 3.2 mEq/l。

まず最初に行うのはどれか。

- a 飲水制限
- b 10%食塩水点滴
- c ループ利尿薬投与
- d 5%ブドウ糖液点滴
- e デスマプレシン中止

30 18歳の男性。生来健康。5日前に外食し、その翌日より、発熱、腹痛、血便を伴う下痢が出現。同日に近医受診し、抗菌薬、整腸薬、解熱鎮痛薬を処方され服用した。腹部症状は3日程度で改善したが、2日前から尿量が減ってきたため受診した。

身体所見：身長165 cm、体重60 kg、体温36.8℃、脈拍90/分、整。血圧140/80 mmHg、眼瞼結膜：貧血(+)、胸部：心音純、肺野清、腹部：異常なし、浮腫なし、皮膚：異常所見なし
尿所見：蛋白(-)、潜血3+、尿糖(-)、沈渣：赤血球10-20/1視野、変形赤血球(+)
尿中白血球0-1/視野。

血液所見：白血球数9,200、赤血球290万、ヘモグロビン9.2 g/dl、ヘマトクリット29.4%、破碎赤血球3%、血小板2.2万。

血液生化学所見：総蛋白7.2 g/dl、総ビリルビン2 mg/dl、直接ビリルビン0.5 mg/dl、GOT 100 IU/l、GPT 40 IU/l、LDH 450 IU/l、尿素窒素70 mg/dl、クレアチニン4.0 mg/dl、ハプトグロビン<10 mg/dl（基準80-200 mg/dl）。

胸部エックス線写真：異常所見なし。

腹部超音波検査：異常所見なし。

診断はどれか。

- a 急性糸球体腎炎
- b 結節性多発動脈炎
- c アレルギー性紫斑病
- d 溶血性尿毒症性症候群
- e グッドパスチャー症候群

31 60歳の男性。腹部膨満と便秘を主訴に来院した。1か月前から左下腹部の不快感を自覚していた。最近1か月間で3kgの体重減少を認めた。腹部の視診、聴診に異常を認めない。左下腹部に、腹筋の弛緩時に5×5cm大の腫瘤を触知する。腫瘤は弾性硬で可動性はなく、圧痛や拍動を認めない。考えられるのはどれか。

- a 腸重積症
- b S状結腸癌
- c 仮性脾嚢胞
- d 鼠径ヘルニア
- e 腹部大動脈瘤

32 14歳の男子。発熱と悪心、嘔吐を主訴に来院した。2か月前に東南アジアを家族と旅行し、帰宅後は日常生活を送っていた。1か月前に37～38℃の発熱が4日間続き、同時に全身倦怠感、食欲不振、悪心、嘔吐を認め、褐色の濃い尿が出るようになった。眼球結膜の黄染があり、腹部触診で肝臓を右肋骨弓下に3cm触れた。

最も考えられる疾患はどれか。

- a デング熱
- b A型肝炎
- c マラリア
- d フィラリア症
- e 病原性大腸菌感染症

33 34歳の1回経産婦。妊娠30週0日、妊娠糖尿病の管理を目的として入院した。妊娠9週に行った随時血糖検査では94mg/dlだった。妊娠26週と妊娠28週の妊婦健診の際、尿糖がいずれも2+であり、妊娠29週2日に75gブドウ糖負荷試験を行ったところ、空腹時血糖値88mg/dl、1時間値194mg/dl、2時間値168mg/dlであり妊娠糖尿病と診断された。

家族歴に特記すべき事はなく、近親者に糖尿病はない。

前回の分娩では3,420gの男児を正常経産分娩している。

身長156cm、体重74kg（非妊時65kg 非妊時BMI27）。体温36.8℃。脈拍72/分。血圧132/80mmHg。内診では子宮口は閉鎖しており切迫早産徴候は認めない。血液検査では特記すべき異常を認めず、HbA1cは5.3%（4.9%（JDS））であった。

適切なのはどれか。

- a ベッド上安静とする。
- b 経口糖尿病薬を用いる。
- c 糖尿病食1,200kcalとする。
- d 分娩後6～12週で75gブドウ糖負荷試験を再度行う。
- e 食後2時間の血糖値を160mg/dl未満となるように管理する。

34 34歳の男性。火災現場で消火活動中に頭痛を訴え、その後意識障害を認めたために救命センターへ搬送となった。来院時、JCS 100、体温37.1℃。呼吸数24/分。脈拍114/分、整。血圧127/67mmHg。酸素飽和度100%。瞳孔は3.0mm、左右同大。対光反射は迅速。口腔内、鼻腔にはススの付着を認めていた。

この患者で認めやすい所見はどれか。2つ選べ。

- a 吸気性喘鳴
- b チアノーゼ
- c PaCO₂の上昇
- d 代謝性アシドーシス
- e 血清ナトリウム値の低下

35 23歳の男性。高校生の頃から日中の眠気で困るようになった。大学1年生時には講義中によく眠るようになり学業に差し支えたが、日中に眠たくなならない時期もあり、試験前にはよく勉強ができた。学年が進むにつれて日中に眠たくなる時期と眠たくなならない時期がはっきりし、概ね1か月から2か月周期で眠たくなる時期とそうでない時期が繰り返した。いずれの時期にも夜間の睡眠はあまり問題がなかった。最近、眠たい時期に甘い物を食べたくなり、太ったという。頭部MRIでは異常を認めない。

この疾患を治療せず放置すると、やがてどうなるか。

- a 軽快する。
- b うつ病に移行する。
- c 多血症と高血圧が続発する。
- d 周期性同期性放電（PSD）が現れる。
- e 全身の骨格筋萎縮が進行し動けなくなる。

36 50歳の女性。約3か月前より小麦加水分解物含有の石鹸を使い始めた。1か月前より洗顔後に流涙とくしゃみが生じるようになった。1週間前、夕食にうどんを食べて1時間後にジョギングを開始したところ、3分後に首と手に痒疹が生じた。ジョギング終了後に手と顔面に発赤・腫脹、また体幹に膨疹が出現した。症状は数時間後に消失した。翌日も夕食にパンを食べた後にジョギングを行ったところ、同様の症状に加えて呼吸困難も出現したため受診した。小麦製品は普段から摂取していたが、摂取後に症状が出現したことは今までにはなかった。血清中抗原特異的IgEを測定したところ、小麦、グルテン特異的IgEが検出された。プリックテストでは小麦とパンの抗原に陽性を示した。

患者への指導として正しいのはどれか。

- a 小麦製品摂取から24時間は運動を控える。
- b 小麦製品を取らなくても運動制限が必要である。
- c 非ステロイド性抗炎症薬（NSAIDs）で症状が軽減する。
- d 小麦加水分解物含有の化粧品の使用には注意が必要である。
- e 症状出現時は皮膚症状のみであれば安静にして経過観察でよい。

37 65歳の男性。

現病歴：咽頭痛と左頸部の腫瘍（30 mm × 30 mm、弾性硬）を主訴に来院した。

既往歴：50歳時、アルコール性肝障害を指摘された。

生活歴：飲酒は日本酒5合/日を30年間。喫煙は40本/日を45年間

初診時の口内所見を示す。

診断および処置で正しいのはどれか。

- a 病変は口腔に位置している。
- b 穿刺、排膿を行う。
- c まず、左頸部腫瘍の生検を予定した。
- d ヘルペスウイルスが発症に関係する。
- e 上部消化管内視鏡検査を行う。

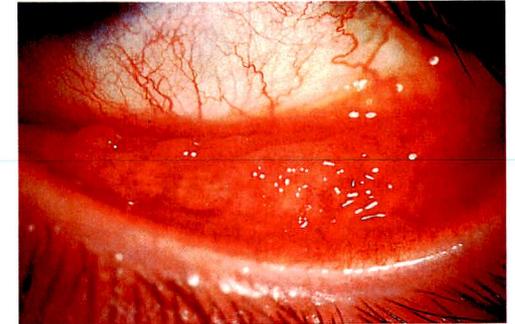


口内所見

38 29歳の男性。2日前から両眼の流涙、羞明および異物感を自覚して来院した。左眼の眼瞼の写真を示す。

有用でない抗菌薬はどれか。

- a β-ラクタム系
- b マクロライド系
- c リンコマイシン系
- d ニューキノロン系
- e テトラサイクリン系



左眼の眼瞼の写真

39 45歳の女性。数日前から上腹部痛が出現していたが、今朝タール便の排出を認めたため来院した。併存疾患はない。十二指腸内視鏡写真を示す。

誤っているのはどれか。

- a 再発性である。
- b 癌化しやすい。
- c U1-Ⅱ～Ⅲの病変が多い。
- d 精神的ストレスが原因となる。
- e ヘリコバクターピロリが原因となる。



十二指腸内視鏡写真

40 28歳の女性。1か月前から感冒症状が出現し、微熱の持続とともに労作時呼吸困難を自覚するようになり精査目的にて受診。血圧の著しい左右差に加え拡張期雑音が聴取された。

この患者に予想されるのはどれか。

- a 僧帽弁閉鎖不全を認める。
- b 三尖弁閉鎖不全を認める。
- c 大動脈弁閉鎖不全を認める。
- d 血液検査により診断が確定する。
- e 動脈閉塞を生じることがまれである。

41 27歳の女性。1月10日から発熱と頭痛が出現。感冒症状は改善したが、18日から精神が高揚し、支離滅裂なことをメモ用紙に書くようになり、19日には意思疎通がとれなくなり、家の中を歩きまわり、奇声を発し、「入ってくる、入ってくる、私死ぬの、何か頭の中がやばい」などの異常言動を認めたため、20日、近くの精神科に緊急入院した。翌日、痙攣発作が出現し、その後、無反応状態になったため、23日転院してきた。

入院時、自発開眼しているが発語はなく、痛み刺激に対する反応も欠如していた。髄膜刺激徴候は陰性。血算、血液生化学は異常なし。髄液細胞数 97/u/l (単核球 97%、多核球 3%)、蛋白 48 mg/dl、糖 87 mg/dl (血糖 120 mg/dl)、1型単純ヘルペスウイルスPCRは陰性。頭部MR画像は異常なし。

入院翌日、低換気となり、人工呼吸管理となる。発熱、頻脈、唾液分泌亢進、口部ジスキネジアおよび四肢にジストニア様の不随意運動が出現している。

入院3週後、頭部MRIを再度施行したが、頭蓋内に異常所見は認められない。

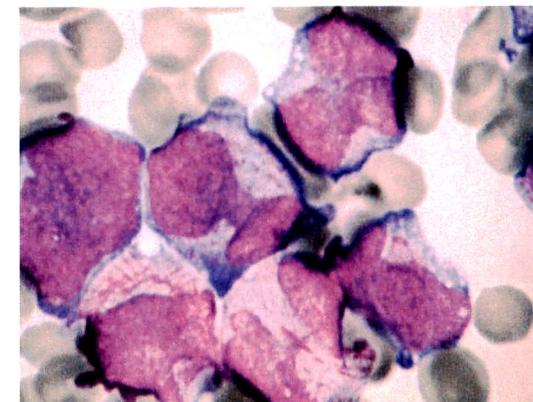
診断および治療上、最も有用な検査はどれか。

- a 脳血流SPECT
- b FDG-PET
- c 骨盤MRI
- d 胸部CT
- e 脳波

42 30歳の女性。四肢の紫斑を主訴に来院した。数日前から易疲労感と息切れを自覚するようになり、2日前より四肢に紫斑が出現した。改善しないため来院した。体温 38.2℃、脈拍 93/分、整。血圧 102/60 mmHg。眼瞼結膜は貧血様であるが、眼球結膜に黄染はない。歯肉に出血あり。呼吸音は正常。腹部は平坦、軟で、肝・脾を触知しない。前腕・下腿に数mm大の紫斑を多数認める。血液所見：赤血球 280万、Hb 7.9 g/dl、Ht 22%、白血球 15000/ μ l、血小板 2.0万、FDP 120 μ g/ml (基準 10以下)、Dダイマー 89 μ g/ml (基準 1.0以下)。血清生化学所見：総蛋白 6.7 g/dl、アルブミン 4.0 g/dl、尿酸 8.2 mg/dl、LD 532 IU/l (基準 176~353)。骨髄検査では大型顆粒を有する細胞の増生を認めた。骨髄塗抹Wright-Giemsa染色標本を示す。

この疾患の血液検査について適切と考えられるのはどれか。2つ選べ。

- a 血清鉄の低値
- b APTT値の短縮
- c フィブリノゲンの低値
- d 血中ハプトグロビン低値
- e アンチトロンビンⅢの低値



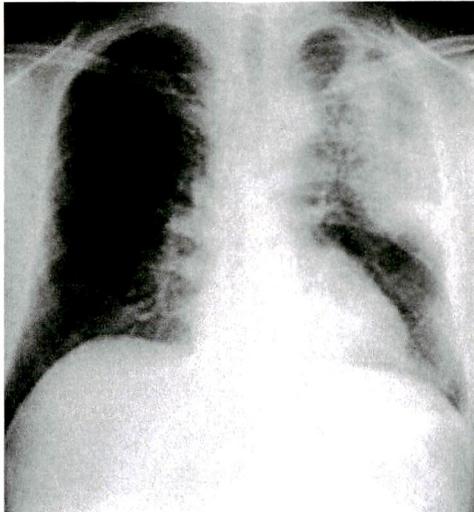
骨髄塗抹Wright-Giemsa染色標本

43 76歳の男性。発熱と呼吸困難を主訴に来院した。生来健康。喫煙歴は20本/日を58年間、飲酒歴は日本酒3合/日を40年間。10日前に温泉旅行に行っている。5日前から38℃台の発熱と咳嗽が出現。3日前から労作時呼吸困難と下痢を認めるようになった。昨日から安静時にも呼吸困難を自覚するようになった。意識レベルはJCS I-1。体温38.8℃。呼吸数24/分。脈拍110/分。血圧98/70 mmHg。室内気吸入下SpO₂ 86%。左胸部でcoarse cracklesを聴取。血液所見：赤血球380万、Hb 13.5 g/dl、Ht 41%、白血球17,200（桿状核好中球15%、分葉核好中球64%、好酸球0%、好塩基球0%、単球4%、リンパ球17%）、血小板18万。血液生化学所見：尿素窒素30 mg/dl、クレアチニン1.4 mg/dl、Na 124 mEq/l、K 4.2 mEq/l、Cl 97 mEq/l。CRP 16.2 mg/dl。喀痰塗抹Gram染色で細菌を認めない。

胸部エックス線写真を示す。

有効な抗菌薬はどれか。

- a カルバペネム系
- b グリコペプチド系
- c スルホンアミド系
- d ニューキノロン系
- e βラクタマーゼ阻害薬配合ペニシリン系



胸部エックス線写真

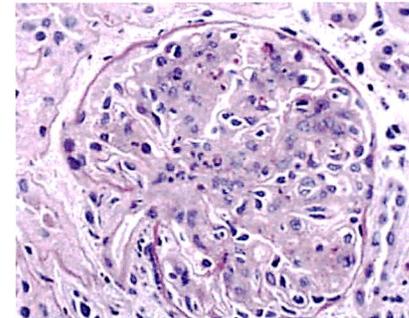
44 48歳の女性。顔面に瘰癧が多数出現し、下腿浮腫が増悪したため来院した。身長162 cm、体重68 kg。血圧162/98 mmHg。満月様顔貌、中心性肥満、赤色皮膚線条および多毛を認める。血中ACTHは測定感度以下、血中コルチゾールと尿中17-OHCSは高値であった。

診断に有用なのはどれか。

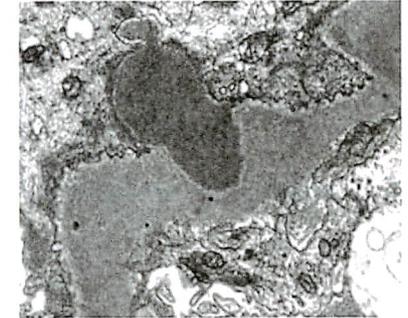
- a 絶食試験
- b 生理食塩水負荷試験
- c 尿中メタネフリン濃度
- d デキサメサゾン抑制試験
- e 血漿アルドステロン濃度・レニン活性比

45 33歳の男性。肉眼的血尿を認め来院した。2週間前に38℃の発熱と咽頭痛が出現し、5日後に症状は軽快した。2日前より眼瞼浮腫に気付き、尿に行く回数が減った。脈拍80/分、整。血圧148/95 mmHg。眼瞼結膜貧血なし。胸部聴診上異常なし。眼瞼と両下腿に浮腫を認める。

尿所見：蛋白+、糖(-)、潜血3+、沈渣に赤血球50~100/1視野、顆粒円柱、赤血球円柱を見る。血液生化学所見：アルブミン3.5 g/dl、尿素窒素28 mg/dl、クレアチニン1.5 mg/dl。腎生検PAS染色所見と、糸球体電子顕微鏡所見を示す。



腎生検PAS染色所見



糸球体電子顕微鏡所見

正しいのはどれか。

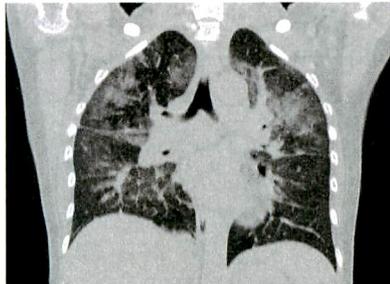
- a 腎機能の予後は不良である。
- b 血清中の補体値は上昇する。
- c 副腎皮質ステロイド薬を用いる。
- d A群β溶連菌感染が原因となる。
- e 抗好中球細胞質抗体が陽性となる。

46 42歳の女性。発熱と呼吸困難を主訴として来院した。4週間前に保健所でHIV抗体スクリーニング検査と確認検査を行い陽性であった。3週間前の血液検査では、CD4 186/ μ l（基準：400/ μ l以上）、HIV-RNA 110,000 copies/ml（基準：20 copies/ml未満）であった。2日前より発熱と呼吸困難が出現したため来院した。意識清明、体温38.2℃、脈拍120/分、血圧114/72 mmHg。口腔内異常所見なし、両側肺野にラ音を聴取する。肝脾腫なし、四肢に異常所見なし。白血球5,100（桿状核好中球8%、分葉核好中球52%、好酸球2%、単球14%、リンパ球24%）、赤血球380万、Hb 11.0 g/dl、血小板13.5万。CRP 125 mg/dl、 β -D-グルカン73.5（基準値<11 pg/ml）。喀痰Grocott染色陽性。

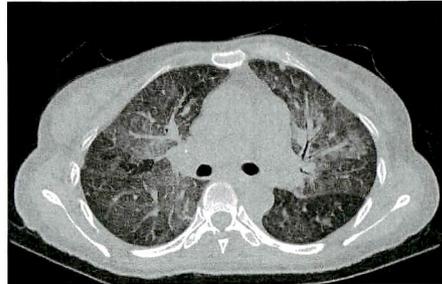
単純胸部CT所見を示す。

治療で正しいのはどれか。

- a ST（sulfamethoxazole・trimethoprim）合剤を経口投与する。
- b ベンタミジン吸入療法を行う。
- c フルコナゾールを経口投与する。
- d 広域ペニシリンを静脈内投与する。
- e アンホテリシンBを静脈内投与する。



単純胸部CT所見

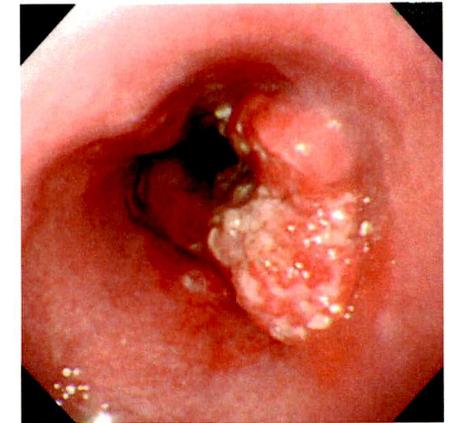


単純胸部CT所見

47 65歳の男性。嚥下困難と5 kgの体重減少を主訴に来院した。上門歯列から32 cmの胸部中部食道の食道内視鏡写真を示す。根治手術が予定された。

正しいのはどれか。

- a リンパ節郭清の必要はない。
- b 内視鏡写真から表在癌が疑われる。
- c 食道部分切除術が第1選択の術式である。
- d 切除後の再建臓器として胃が用いられることが多い。
- e 切除後の再建経路として胸壁前経路が用いられることが多い。



食道内視鏡写真

48 生後2日の女児。在胎38週、3,014 gで出生。全身状態は安定、哺乳（直接母乳育児）は良好。本日生器より微量の出血を認めた。

正しい対応はどれか。

- a 禁乳とし、輸血を行う。
- b 緊急で腹部CT検査を行う。
- c 禁乳とし、輸液を開始する。
- d 母乳を継続し、経過を観察する。
- e 直ちに母乳を中止し、人工乳へ切り替える。

49 30歳の3回経妊婦。妊娠29週。胎動が感じられなくなったことを主訴として来院した。最後に受けた妊婦健康診査は5週前で、その時は胎児心拍動を確認され、妊娠24週相当といわれた。現在、外診による子宮底長から、妊娠24、25週相当である。胎児が拍動を認めない以外、内診では異常を認めない。超音波検査で、胎児死亡を確認した。

直ちに行うべき母体の血液検査はどれか。

- a 赤血球数
- b グルコース
- c フィブリノゲン
- d エストリオール
- e AST (GOT)・ALT (GPT)

50 68歳の男性。幼少期に受傷した熱傷後の瘢痕を左下腿前面の2/3周性に認めていた。瘢痕にはしばしばびらん面を認めていたが抗菌薬含有軟膏を塗っていた。5か月前より左下腿後面の瘢痕内に小豆大の腫瘍が出現し、2か月前より腫瘍の急激な増大傾向を認めたため来院。左下腿前面に存在する腫瘍の写真を示す。

最も考えられる診断はどれか。

- a Bowen病
- b 悪性黒色腫
- c 基底細胞癌
- d 有棘細胞癌
- e 乳房外Paget病

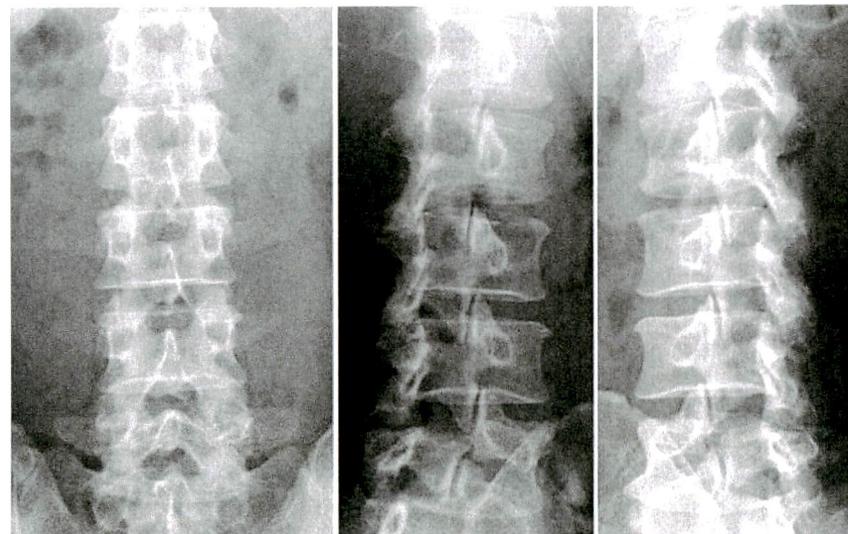


腫瘍の写真

51 20歳の男性。以前より繰り返す腰痛が生じていた。野球で投球後、急に腰痛を認め来院した。腰椎エックス線写真を示す。

最も考えられる疾患はどれか。

- a 腰椎椎間板ヘルニア
- b 腰部脊柱管狭窄症
- c 腰椎すべり症
- d 腰椎破裂骨折
- e 腰椎分離症

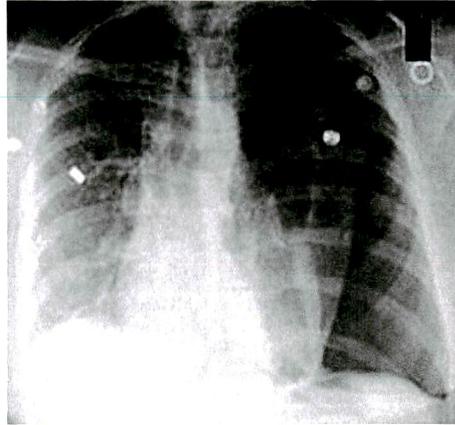


腰椎エックス線写真

52 60歳の男性。歩行中に乗用車にはねられ、6m飛ばされた。救命センター搬送時、呼吸苦を訴えており、脈拍126/分、血圧80/42 mmHg、SpO₂ 87%（酸素10Lリザーバーマスク下）であった。左頸静脈怒張を認め、聴診上左呼吸音の消失を認めた。胸部エックス線単純写真を示す。

診断はどれか。

- a 大量血胸
- b 横隔膜破裂
- c 緊張性気胸
- d 心タンポナーデ
- e フレイルチェスト



胸部エックス線単純写真

53 21歳の女性。意識障害を主訴に搬入された。

現病歴：1週間前より38℃台の発熱を認めていた。昨日から頭痛を自覚していた。本日頭痛が悪化、意識障害が出現した。

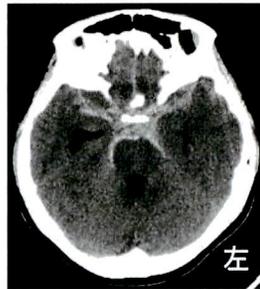
既往症：特記すべきことはない。

現症：体温38.6℃。呼吸数20回/分。脈拍108回/分。血圧182/72 mmHg。心音で収縮期逆流性雑音を認めた。意識はJCSⅢ-100、瞳孔は2.5 mmで左右差なく対光反射は両側迅速であった。検査所見：白血球15,100/ μ l、CRP 9.4 mg/dl。

来院時頭部単純CTを示す。

診断に有用なのはどれか。3つ選べ。

- a 腰椎穿刺
- b 心臓超音波
- c 脳血管造影
- d 血液培養
- e 心臓カテーテル

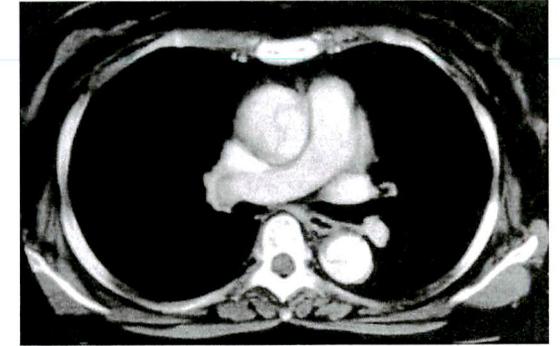


頭部単純CT

54 63歳の男性。10年前より高血圧の治療を受けている。突然の強い胸背部痛のため救急車で搬送された。体温36.5℃、脈拍92/分、整。右上肢の血圧180/92 mmHg。左上肢は脈拍を触知しない。両下肢は冷たく脈拍は微弱である。胸部造影CT画像を示す。

この疾患の合併症として考えにくいのはどれか。

- a 急性心筋梗塞
- b 大動脈弁閉鎖不全症
- c 僧帽弁閉鎖不全症
- d 一過性脳虚血発作
- e 急性腎不全



胸部造影CT

55 14歳の男子。幼児期に発達の遅れを指摘されたことはない。小学生の頃も、担任から学校生活や学習上の問題を指摘されたことはない。中学校に入学し、近所の不良仲間と一緒に行動するようになった。喫煙して規範を破り、集団万引き、けんか、火遊び、いじめを頻繁に繰り返すようになった。

診断はどれか。

- a 反社会性パーソナリティ障害
- b 注意欠陥多動性障害
- c 広汎性発達障害
- d 行為障害
- e 知的障害

56 28歳の男性。幼少時より両側の肘と膝に皮疹が認められ、寛解と再燃を繰り返してきた。1か月前から仕事が忙しく睡眠不足になっていた。1週間前から両側の肘と膝の皮疹が増悪し、全身に拡大した。血液検査で末梢血好酸球数増加と血清IgE高値を指摘された。

この疾患にしばしば併発しやすい病気はどれか。2つ選べ。

- a 糖尿病
- b 足白癬
- c 有棘細胞癌
- d 伝染性膿痂疹
- e Kaposi水痘様発疹症



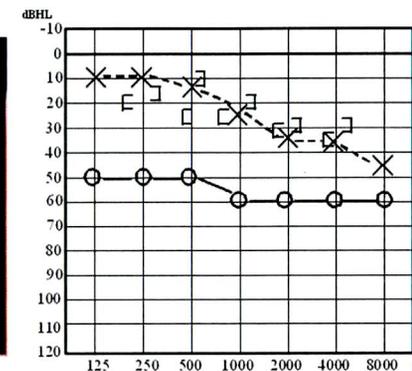
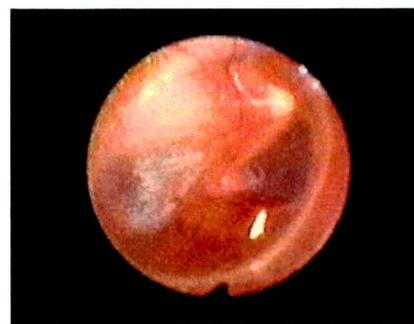
肘と膝の皮疹

57 63歳の男性。数日前より急に右難聴が出現したために来院した。耳閉塞感があり、低音性耳鳴がある。めまい症状はない。感冒症状はなかった。

鼓膜所見および標準純音聴力検査を示す。

この症例の診断を進める上で重要な検査はどれか。2つ選べ。

- a 耳音響放射
- b 温度刺激検査
- c ティンパノメトリ
- d 鼻咽腔ファイバースコープ
- e ABLB (alternate binaural loudness balance test)



鼓膜所見および標準純音聴力検査

58 68歳の男性。健診にてPSA 6.1 ng/ml (正常4.0 ng/ml以下)を認め、精査にて前立腺癌と診断された。根治的前立腺摘除術を施行され、術後経過良好である。

退院後の経過観察において、重要な合併症はどれか。2つ選べ。

- a 膀胱瘤
- b 膀胱脱
- c 勃起不全
- d 膀胱尿管逆流
- e 腹圧性尿失禁

59 62歳の女性。左眼の流涙を主訴に来院した。数年前から左眼に涙がたまりやすいことを自覚しており、1年前から流涙をきたすようになった。涙道造影で涙嚢は正常に描出されており、そこから尾側の涙道が造影されない。

治療として適切なのはどれか。

- a 涙嚢摘出術
- b 下甲介切除術
- c 涙小管形成手術
- d 涙嚢鼻腔吻合術
- e 鼻内前頭洞手術

60 6歳の男児。背が低いことを心配した母親に連れられて来院した。3歳時の健診でも背が低めと言われたが医療機関は受診しなかった。小学校就学前になり周りの児との身長差が気になり始めたという。在胎39週、身長49.0 cm、体重2,950 g、骨盤位で出生した。仮死はなく、黄疸遷延もなかった。発達上の問題は指摘されたことはなく、家族歴も特記すべきことはない。身長100.0 cm (-2.8SD)、体重16.0 kg。外表奇形や四肢短縮は認めない。初診時に行った検査では、TSH 1.1 $\mu\text{U}/\text{ml}$ (基準0.44~4.1)、FT3 3.0 pg/ml (基準2.5~4.5)、FT4 1.2 ng/dl (基準0.8~2.2)、IGF-I 52 ng/ml (基準64~203)。手エックス線写真で骨年齢は4歳であった。

現時点で適切な対応はどれか。

- a 染色体検査を行う。
- b 心配ないと説明する。
- c 1年後の再診を指示する。
- d クロニジン負荷試験を行う。
- e 血中ビタミンD濃度を測定する。